

GLOBAL DIALOGUE

グローバル・ダイアログ：国際社会学会ニュースレター

第1巻 第4号 (2011年4月号)

Revolutionary Moments in Tahrir Square

タハリール広場での革命的瞬間

Mona Abaza モナ・アバザ

The Arab Revolutions: Who Are The Actors?

アラブ諸国での革命：誰がアクターなのか？

Sari Hanafi サリ・ハナフィ

Yokohama: The Harbor of Hope

横浜を「希望の港」にしよう

Koichi Hasegawa 長谷川 公一

> コスモポリタニズムへの挑戦

> 不平等に立ち向かう

> ISA理事会報告

> 国境のない世界

> トルコ社会学会

> 欧州における各国学会組織の現状

> ヒストリー・コーナー：1982年メキシコ世界社会学会議

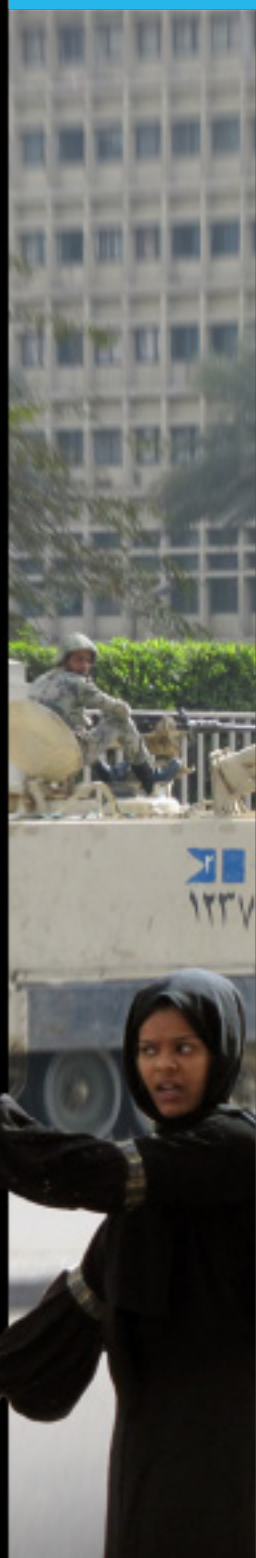
> 人権：社会学者であることは罪なのか？

NEWSLETTER

4
GDN

VOLUME 1 / ISSUE 4 / APRIL 2011

International
Sociological
Association



我々が前回のニュースレターを発行した後、世界は変化を遂げた。カイロ人たちが世界中で躍動し、その存在を示し始めている。アラブ反政府革命暴動——我々がそれらを革命と呼べるのかどうか未決であるが——は、社会運動の勃発を予想することがどんなに困難であるかということを改めて示した。私たちは、運動がいったん表面化すると、その伝播や展開の道筋をより理解できる。そこで今回掲載した2つの記事は、革命の過程に焦点を合わせたものとなっている。モナ・アバザは2011年1月と2月にタヒール広場周辺に居た状況について描写した。一方サリ・ハナフィは、現在チュニジアとエジプトで社会変革のために戦っている社会的アクターたちの連繋について考察している。

3番目の記事は、日本を破壊した地震が大きな原発事故を引き起こしたが、このことは人々の震動から地球規模の震動へと我々の思いを馳せさせる。環境社会学者である長谷川公一氏はこの15年間、日本は核政策を転換させるのにもう一つのチェルノブイリ体験をすることが必要なのかと問いかけられてきた。我々はいまだその問いに対する答えを知らない2014年に横浜で開催されるISA世界大会の現地の組織委員会委員長として、先般メキシコシティで行われた理事会にて、長谷川先生は今回の地震と津波による震災に際した日本人の対応について感動的なスピーチを行った。それにより、2014年の大会を成功裡に終わらせるというコミットメントをISA役員会が一層強めたこともあり、そのスピーチ原稿を今回掲載した。

今回のニュースレターは、3月21-22日に行われた理事会での協議およびそれと並行して行われた、大会プログラム部門担当のラケル・ソーサ・エリザガISA副会長による、不平等に関する国際大会についての報告も掲載している。ジェニファー・ブラットは、彼女の担当する「ヒストリー・コーナー」欄にて、有名な、1982年にメキシコシティで開催された世界社会学会議を紹介している。これはISA世界社会学会議「第三世界」と呼ばれる国で初めて開催された時であった。その大会が、世界の社会学について一連の討論を行うきっかけとなり、その形式は現在まで続いている。今回のニュースレターでは、例えばスジャー・パテルがグローバル社会学とコスモポリタニズムに対して、多様な国家伝統という視点から、問いを投げかけている。また今回は、欧州社会学会、トルコ社会学会、「国境なき社会学者」アメリカ支部からの報告書も掲載している。最後に、トルコとハンガリーにおけるケースから、社会学者の人権侵害についての新しいコラムを設けた。

我々はニュースレターの読者層をさらに広げ続けている。我々は今や一般的となったフェイスブックにISA特設ページを開設し、ISAのホームページも一新し、「デジタル・ワールド」についてのセクションも設けた。サリ・ハナフィやムニール・サイダニ、そしてイーシュワル・モディの取組みにより、『グローバル・ダイアログ』は今やアラビア語、ヒンディー語でも翻訳され、全部で9か国語バージョンとなった。社会学はいま進化を続けている! (芝真里訳)

編集部より	2
タヒール広場での革命的瞬間	3
アラブ諸国での革命:誰がアクターなのか?	6
横浜を「希望の港」にしよう	9

> DEBATE 討論

多様なエピステーメからなる国際社会学	12
不平等に立ち向かう:メキシコシティでの国際討論	14

> MEETINGS AND ASSOCIATIONS 会議・学会

ISA理事会議報告(於:メキシコシティ)	15
国境のない世界	17
トルコ社会学会20周年を祝う	18
欧州における各国学会組織の現状	19

> SPECIAL COLUMNS 特別コラム

ヒストリー・コーナー: 1982年メキシコ世界社会学会議	8
人権:社会学者であることは罪なのか?	20

表紙写真提供:モナ・アバザ





タハリール広場の平和的な抗議者たち
(写真提供:モナ・アバザ)

> Revolutionary Moments in Tahrir Square

タハリール広場での革命的瞬間

by Mona Abaza, American University of Cairo
モナ・アバザ(カイロ・アメリカン大学)

あの重大な事件を引き起こす触媒となる1月25日のデモがあったとき、私はちょうどカイロに居合わせた。私は初めのうちはデモに参加しなかった。私が政治的に活動するようになってからは、多くの年月が経っていた。実のところ、告白すると、それまでの数えきれないほど多くのデモで暴力と蛮行が目撃されていたことが、きっと私が通りに出ることを控えさせていた最大の理由であった。

最初の日から、警察はデモ隊に対して冷酷であった。その日からデモに活発に参加していた友人たちは、その暴力を次のように回顧した。ゴム製弾や放水、そして たくさんの催涙ガス弾が抗議者たちに向かって投げられた。街は焼けていた。催涙ガスによる攻撃とその悪臭は街を数日間覆った。例の1月25日には、相当数の負傷者と共に3人が亡くなったとの報道があった。¹

ムバラクは全国レベルで鉄道網を封鎖した。この聡明さを欠いた統制手段では、怒りに震える人々が首都カイロへ流入してくることを阻止することはできなかった。実際に、公共の場での人々の姿は、1月25日以降、街の通りで日に日に増えていった。デモは決して止むことなく続いた。日に日に、人々はカイロ市内のすべての通りを占拠していった。

彼らは皆、あの広場を目指していた。カイロは警察署への攻撃により崩壊していった。暴徒がいたところに現れ、略奪行為があらゆる地域でなされていた。警察が暴力的になればなるほど、さらに決意を固めた抵抗者が現れ、そのような人々がさらに通りで目立つようになっていった。アレクサンドリアやポートサイド、マンスーラ、エルマハラエルクブラといった街はすべて、同じように怒りに震える抗議者たちによる大規模な反乱を経験することとなった。カイロでは、ショブラから、そしてマッターリヤ、ブラク、

ドッキ、モハンデシーン、ナスル・シテイ、ヘリオポリスから出発したデモ隊が、10月6日橋およびカスル・エル・ニール橋で合流した。そこで酷薄無情な衝突が記録された。体制側の残忍な行為に対する怒りは、抵抗を決意させるまでに上りつめていた。このとき、事はきっと違ってくる、と言われていた。抵抗者たちは恐怖を忘れ、バリケードを築き、共に祈りつつ、黒に身を包んだ警察に対峙し、攻撃に対しては投石で抵抗した。彼らは、自分たちの方へ突っ込んできた緑の警察車両にも恐れることはなかった。そして警察隊は——まずまず恐怖感を持たずに、ぎっしりと密集した大群となって動く人々に対処できずに——その恐怖から撤退を始めた。警察隊は、力強いが平和的解決を掲げる群衆から逃走した。突然すべての警察官が姿を消した。カイロは、ある日目覚めると街全体から警察官がひとりもいない状態になっていたのである。そこで軍がカイロ市内へ戦車が入ってきた。

多くの人々は私と同様に、政治的活動者ではないし、抵抗者たちとの衝突でなされた暴力行為を恐れていたのだが、ついにはあの広場への行進に参加することを決意したのだった。中産階級の母親たちは通りへと下っていった。私の友人たちの息子や娘たちは、彼らの人生において、まるで脱皮するかのごとく急速な変化を経験した。これらの若者たちは、自分たちの両親によって通りに導かれたのだが、その日から抵抗を続けた。彼らは、あの広場での生活において、新しい自分というものを見つけたのである。若者のなかには、市街戦において新しく身に着けたスキルを誇らしく思う者もいた。

そして、初めての百万人規模のあの壮観なデモは、歴史的な瞬間となり、エジプト人たち自身を魅了した。それは新たに発見した自由と、皆で渴望していた尊厳とを得たことによる陶酔感であった。その状況を描写するのに適切な言葉を私は見つけることができないが、とにかく2百万人以上の人々が、平和的に、そして秩序を守りつつ、「タハリール広場」というひとつの主要な場へと行進をしたのであった。その一群は圧巻であった。秩序に対する明確な感性は、平和的なやり方でタハリール広場へと突き進んでいく若者たちによって操られていた。それは、もっとも特筆すべき点である。人々は、若者たちが何も過ちを犯さぬよう、お互いをいたわり合

>>>

うことに驚いた。タハリール広場は軍の戦車や兵士たちに取り囲まれており、兵士たちは政府側の暴徒やいかなる兵器も広場へ立ち入らぬよう、人々の身分証明書を確かめていた。そのチェック・ポイントでは、男女が分け隔たれて、厳しく訓練された反ムバラク・グループの若い男女による「民衆の代表者たち」によって制御されていた。鞆や財布が検査された。ナイフ、ハサミ、そして危険物となりうる道具は没収された。コントロール・チェック・ポイントは、政府側の暴徒が止むことない脅威となっていたため、チェックの段階が増やされた。そのため、人々が広場のまわりを取り囲み、細心の注意がなされた結集状態となっていた。

> The Carnage of 2nd of February 2月2日の大虐殺

2月2日は、私の娘そして私自身にとって忘れえぬ日となることだろう。その前夜、ムバラクはテレビを通じて、明らかに邪悪で脅迫するような声音で、2回目の声明を発表した。彼は、統治者としての座を明け渡すことはいないと主張し続けた。それはまるで、彼の憤怒が、彼に従おうとしない国民に対してもうすぐ向けられるかのようであった。2月2日の午後、私たちは友人2人と私の娘とともに他の友人たちと会い、しばらくそこで過ごすつもりで、タハリール広場へ行った。私の友人であるサミアが、タラート・ハブ通りとババアルク通りに面する大きなフラット[アパート]を9階と10階にと2軒持つ共通の友人であるピエールを訪問しよう、と提案した。午後4時ごろ、エジプト国立博物館の方向からやってきた武装した暴徒による攻撃が始まった。我々は、デモ参加者や軍の戦車に守られていたチェック・ポイントから、ひどく負傷した人々が広場を離れる一団によって運ばれていくのを見た。多くは頭や目を打ち抜かれていた。「ラクダの戦い」はすでに始まっていたが、幸運なことにデモ参加者は、広場へラクダと馬で乗りこんできた暴徒たちを逮捕することが出来た。それまでに、私の2人の友人たちは、私たち全員が泊まっていたザマレク島へ戻ることを決めていた。私は娘と共に残ったが、それは彼女を連れて歩いて戻ることが危険すぎると考えていたからである。私はあれほど多くの負傷者を見た後であったので、すでにパニックに陥っていた。

午後5時半ごろ、政府側の暴徒が大きな一群となって、タラート・ハブ

通りからタハリール広場へとやってきた。彼らは、モロトフ・カクテルと呼ばれる火炎瓶を投げつけた。そして彼らはデモ参加者に向かって発砲し、彼らの行く手にあるものは何でも燃やしていった。特に彼らは、車に火を放ち、その上で車をひっくり返していった。ひとつ明らかであったことは、車が燃えようとも、暴徒が争おうとも、軍の戦車は何もしなかったということである。反ムバラクを唱えるデモ参加者たちは、改修工事中であった旧ヒルトンホテルから集めてきた少々の金属を盾として使い、チェック・ポイントでバリケードを築き、自分たちを守ることで精いっぱいであった。彼らが使えた武器は、拾った石を投げることであった。道はまったくもって混沌状態と化しており、多くの人が負傷していた。その夜、4人が殺害され何百もの人々が負傷したと報道された。²しかし私たちが目撃した光景から、死亡者は報道された数よりもずっと多いことは明らかであった。幸運にも、暴徒たちは押し戻され、広場へ侵入することは出来なかった。我々はその夜を、ピエールのフラットで過ごした。ピエールは、自宅のバルコニーから撮影した何百もの写真をフェイスブックで利用できるアカウントすべてに掲載するのに忙しくしていた。それが、インターネットの使用が5日間ほど凍結された後の最初の日であった。ピエールの素敵なデカダン風でベルエポック調のフラットは、大きなシェルターとなっていた。そこには、ベッドがいくつかと毛布が床に敷かれていたのである。

彼のちょうど広場の上にある2つのフラットは、行き交う多くの人々を迎える場所となっていた。そこにはフランス人、イタリア人、アメリカ人、そしてエジプト人のレポーターがいた。そして、息子や娘が広場に行っているという母親たちがいたし、デモ参加者であったが街頭の様相が攻撃的になるにつれ避難してきたたくさんの若者や年配者もいた。デモ参加者の中には、かつてアメリカン大学で私の学生であった者もいた。私は喜びつつも、彼らがそのような方法で戦闘員となってしまったことを本当に恐ろしくも思った。私の優秀な教え子であった一人の女性は、4日間に渡って広場で野宿していたそうで、完全に疲れ切っていた。他のデモ参加者も、私の友人たちの息子や娘たちであることが判明した。そして、デモ参加者の友人であり、フラットには誰も知り合いがいない人でも快く迎え入れられていた。夜間に暴力がエスカレートして

いくにつれて、フラットにやって来るデモ参加者の数が増えていった(おそらく50-60人ほどになっていた)。デモ参加者の中には、顔や手、そして足を負傷している者もいた。

別の部屋にあるテレビは、止むことなく騒がしく放送を続けていた。私たちはこの部屋を行ったり来たりしていた。中にはテレビの前で寝ているものいたが、完全に疲れ切っていた。私たちは皆、2つのことを代わる代わる行うことに必死であった。まずは、3つの大きなバルコニーを動き回り、タハリール広場とそれに隣接するタラート・ハブ通りとババアルク通りで何が起きているのか見ようとしていた。そして私たちは、暴徒が次にどの方向へ攻撃しようとしているのかを見極めるために、部屋へ駆け込み、テレビのニュースを観ていた。広場の辺りで本当に何が起きているのかを見極めるのに、アルジャジーラ放送局を参照していた。私たちは古代博物館の方向からの攻撃を見ることもできなかったし、火炎瓶を手にも10月6日橋からやって来るデモ参加者を攻撃する暴徒たちを見ることもできなかったが、その代わりにそれらをテレビで観ていた。私たちはまた、テレビで暴徒が広場の木々に火を放つ様子を観て、きっとその火災が大きくなって周りの建物も巻き込むのではないかと思い、皆パニック状態に陥った。テレビ画面が、私たちのたったひとつの危険を感知するガイドとなっていた。しかし、フラットにいた私たち全員には、共通する気持ちがあった。ムバラクへ向けられた限らない憎悪である。私たち全員が同じ考えを持っていた。すなわちそれは、今夜行われた虐殺はまさにムバラクが政権から降りないと表明した日の翌日であったということだ。もし彼がもう1週間その座に留まれば、被害は想像を超えたものになるだろう。彼の極端で自己中心的な狂気は限界を知らなかった。

私たち全員とまでは言わなくとも、ほとんどが携帯電話を使用していた(携帯電話の使用禁止令や管制は解けていた)。母親のすべてが、広場にいた息子や娘たちに電話をかけていた。彼女らは、テレビで映し出されている光景を、広場にいた者たちに伝えていた。母親の中には、子どもたちに、広場から引き揚げてくるよう懇願している者もいた。報道関係者たちは、取り残されたのか、おそらく広場の反対側での小競り合いで行方不明となった同僚たちに電話を掛けていた。

一方、広場は夜中ずっと夜明けまで、円状に動き続ける人々であふれかえっていた。女性や子どもたちは広場の中央で野宿していた。オマル・マクラム・モスクのそばにあるスピーカーは宗教的なスローガンを叫んでおり、一方、他のスピーカーは1960年代の愛国歌を流していた。夜半過ぎ、ある時をきっかけに、デモ参加者たちは金属でつくった防弾盾をリズムカルに打ち鳴らし始めた。この異なった音色は、デモ参加者たちがいかによく組織されているかを示していた。その統制のとれた噪音は、彼らを覚醒させ続け、次なる危険がどちらの方向からやってくるのかに注意を促していた。これらの騒音、特にヘリコプターが低空飛行を続けている音も、何か不吉な予感をもたらしていた。

ピエールのフラットで夜を過ごした母親の何人かは、広場にいる娘や息子たちが戻ってくるのを待っていた。夜遅くに伝えられたニュースを観て、母親の多くは泣いていた。一人の母親は、携帯電話で娘に抵抗をあきらめるよう懇願していた。私は自分の娘にくっつき、このようなことがすべて終わればいいのに、と願った。

> Contagion 伝染

これらの回顧録を書く中で、私の娘が2月2日の夜に起こった一連の出来事を思い出すための重要なガイドとなった。私たちは二人とも、似た問題を経験したようであった。二人とも、記憶を辿ろうとすると、無意識におぼろげにしか思い出せないようになっていた。私たちは二人とも、その症状の原因は、その時の状況に対する緊張と、広場の光景とテレビから流れるイメージを絶え間なく行ったり来たりして見ていたことと関係していると確信するようになった。私の娘は、ピエールのフラットでの夜を、シュールレアリスム的な瞬間と表現した。ひとつ証拠を挙げるとすれば、テレビでの光景が拡散し、私たちの記憶に効果的に入植して、現実を絶え間なく具象化していったことである。

アドルノとホルクハイマーが、もしエジプト革命であるジャジーラの役割を目撃したなら、彼らは「文化産業」とテレビの繰り返しの効果に関して、自らの予言力に対してきつと改めて考えなおしたであろう。明らかに、プロパガンダと現実の間の驚くべき裂け目や、国営放送の掲げるプロパガンダ

のばかげた嘘をあばいた衛星放送局がなければ、革命は成功しなかったであろう。衛星放送局は、フェイスブック、携帯電話、インターネットが政権によって遮断された際、さらにその存在感を増した。

これからの数年、アカデミック・リサーチの計画は前代未聞の、アラブ革命において果たしたアルジャジーラの役割について学ぶことで忙しくなりそうである。そしてその革命の多大な勝利は、アルジャジーラのものである。ジャーナリストたちは、自分たちの主体性と街頭での支援活動を隠そうとしなかった。彼らの巧みな運動と、事務所が徹底的に調査されエスカレートする魔女狩りを経験するであろうと予測して賢く先回りしたことにより、彼らの英雄的イメージは高められた。その抵抗の精神は、チュニジア、アルジェリア、エジプト、イエメン、バーレーン、リビア、そしてオマーンなどへ伝染し魅了していった。そのことは、テレビという手段がイメージを伝達させていく力と速度を明らかに見せつけたことを意味する。そこには明らかに、抗議で掲げたスローガンとアラブ世界に火の手が回るかのように広がった要求において、共通要素があった。

アラブでの革命は、尊厳、認識、不平等、明らかな腐敗と独裁という広い問題から起こったのである。事実として、この革命が西欧で広く知られることに成功したことを通じて、エジプト人たちはその機知と俊敏さで名声を得た。確かに、それは血生臭い革命ではあったが、そうではなかった面もある。何度も解説者は、タハリール広場が、素晴らしいアイロニックなミュージシャンやダンサーにとって、反体制文化と人気のある芸術的想像力を集める磁場としてその存在を蘇らせた、と繰り返すことを止めなかった。有名なエジプトの皮肉たっぷりの「ジョーク」や、最も素晴らしい即興の大衆パフォーマンスは、エジプトの最盛期にその広場でできたものである。

革命児たちは、西欧にコスモポリタニズムとデモクラシーにおける大切な考え方について教訓を与えた。これら二つの主張は、長い間いわれる南側では、成熟さのない、子どもっぽい言い訳の下で否定されてきた。これらの価値は、もはや西欧に限ったことではないことが再び証明された。エジプト人たちの68運動がついに街頭へやってきたとき、ザラツィンの狭い見通しに基づいて、人種の遺伝的変質と

ドイツにおけるトルコ人の統合についての国家レベルでの討論が同時に起こった(ザラツィンの件については、グローバル・ダイアログ1-3号のヘルマ・ルッツ『コスモポリタニズムから公共社会学へ』を参照のこと)。

エジプト革命を、ロシアや中国の革命と比べるにはまだ時期早々かもしれない。しかしエジプトのケースが際立っていたのは、インターネットやフェイスブック、携帯電話やツイッターが情報を伝達するのに最も早い方法として欠かせないツールとなったことである。これは、賛否両論あるテクノロジー——潤沢な消費文化と消費者の生活様式のためのものとしれば否定的に見なされる——が、実際にはここでは臨臨床的にみて狂っているアラブの専制君主たちによる鉄のカーテンに対する抵抗に使われることを証明したのである。しかし、ここでいうテクノロジーは単に手段であり、メッセージとは決してなり得ていなかった。手段はすべて速度に関するものであり、そしてメッセージは純粹に街頭で行われていることであった。ネットワーク社会におけるあらたな指標を作る上でのサイバー・スペースの役割を指摘した点で、マニエル・カステルは正しかった。

彼は、新たな情報言語と新たなコードについて語っている。タハリール広場を見た多くの人々は、反ムバラクを掲げるのにもっとも効果的でありながら一番短く簡潔であるスローガンを作った、4月6日運動の若い抵抗者たちが見せた賢さに魅了された。これらの簡潔なスローガンが、何百万ではないとしても、何千もの支持者を集結させた主要な手段となった。スローガンの中には、「irhal」=「去れ」や「baatel」=「不適正」というように、一語のみで表されたものもあった。これはカステルが予言したように、電子通信における成文化や省略化された言語による効果であったのだろうか？それに対する実際の答えはない。

(芝真里訳)

¹ 実際は、現在もまだ何百もの人々が見つからないことから、ずっと多くの人々が最初の日に亡くなっていると思われる。

² 後に報道は、本当の死亡者数が分かったと述べた。多くは病院にて死亡が確認されたが、政府はその高い死亡者数を隠蔽するために死亡確認書の発行を制限していたのである。

> The Arab Revolutions: Who Are the Actors?

アラブ諸国での革命: 誰がアクターなのか?

by Sari Hanafi, American University of Beirut, ISA Executive Committee
サリ・ハナフィ(ベイルート・アメリカン大学、ISA理事)



| (写真提供: モナ・アバザ)

エジプト革命での団結: 緑字 での表記内容(上) - 「勝利への革命」、赤字での表記内容(下) - 「我々貧者が我々の国を守り、暴漢や内務省の役人から革命を守るのだ」

この4ヶ月間、政治における地殻変動がアラブ諸国を激しく揺さぶった。これらの革命は、チュニジアとエジプトの大統領を打倒し、イエメン、バーレーン、リビア、ヨルダン、シリアにも波及している。これらの諸国での民衆蜂起の成功をどう規定するかにかかわらず、これらの革命が独裁体制を政治改革へと向かわせるものであったことは明白である。

これらの革命の重要性は、社会的、民主的な要求を満たすことにある。例えばチュニジアにおける民衆蜂起が、2年前にGafsaにおいて食糧や失業をめぐる抗議から始まったことを忘れてはならない。Jarjisなどチュニジアの都市において、反体制派のプロガーやフェイスブック利用者が政治犯の釈放や表現の自由を要求した。チュニジア、エジプト両国において、革命は若者、失業した大学卒業生、労働者階級が主導し、社会的、民主的変革への要求に特徴づけら

れていた。

抗議する人々における失業問題への関心の高さ、新自由主義、世襲体制に対する敵愾心は、彼らの正義、尊厳、自由といった感覚に関連している。自由とは、具体的には、政治グループや政党への参加の自由、表現の自由、宗教的行為の自由、政府内の腐敗した人々について書くことの自由などである。いわゆる「チュニジアの経済的奇跡」は、首都や北部の沿岸部の都市におけるものであり、チュニジアの内陸部や南部にはあてはまらないことを忘れるべきではない。アラブ諸国の若者たちは、イタリアの哲学者ジョルジョ・アガンベンが言うところの「ホモ・サケル」になると感じている。その意味するところは、体制が、政治的アイデンティティや、イスラム復興運動「al-Nahda」、チュニジア共産主義労働党、ムスリム同胞団などといったグループに所属する権利を剥奪したことによる無防備の渴望した体、つまり「むき出しの生」bare livesによる反発である。

チュニジア、エジプトの大統領、ベンアリとムバラクが、法律を制定するか停止するか、「生かすべきか殺すべきか」といった究極の決定をできる統治者になったとき、彼らは、逮捕、拷問、殺人、また国を経済的に破滅させること

>>

で、エジプト国民、チュニジア国民の権利を侵害したのである。

「アラブ世界における異議と抵抗の国The State of Exception and Resistance in the Arab World」と題した本を昨年編集した際、Mohsen Bouaziziというチュニジアの社会学者が、チュニジアの若者の間における無言の反対表明について、そして体制に対する無関心や無頓着がいかに広まっているかについて、論じた。しかし、その際Mohsen Bouaziziに見えていなかったことは、Mohsenと同じSidi Bouazid出身のMohamed Bouaziziのような人物が、社会生活からの疎外の果てに、トゥレーヌの言葉を借りれば、社会運動の原動力たる主体になったことである。

Mohamedの身体は、他のチュニジアの若者の身体と同様に、政治的アイデンティティを取り去ることを目的とした抑圧体制とその学問的権威を攻撃目標にするものだった。それゆえMohamedは、抗議の自殺をすることで、身体の自己犠牲の瞬間にその有効性が達成される抵抗の形を作り上げたのである。パレスチナの研究者May Jayussiが述べるように、占領地のパレスチナ人が、自分たちを屈辱的な主体——それは何ら知られることなく殺される主体、つまり無価値な死——にしようとする主権に対して、異議申し立てをするときと似た契機である。自殺したMohamed Bouaziziと彼の仲間、自分たちを意図的に犠牲にするアクターとなり、その行為によって、主権との関係を反転させたのである。

しかしながら、ベンアリ体制のあらゆる抑圧と永久的な例外状況の使用にもかかわらず、この体制はすべてをコントロールできるような全般的な機構ではなかった。「強大なる」ベンアリ体制が、警察の抑圧的規則を知らせるために軍を使うことができなかったときのように、結局、抑圧が強さというより弱さの証であるのはよくあることである。体制は、特にディアスポラの地において、反対の声を沈黙させるのに失敗した。このことは、民主化に向けた闘争をしているすべての人に対して、秩序の変革を作り出すために体制の弱点をどう利用するかという、希望の光を提供した。

たしかに、アラブ諸国の革命の象徴的次元は注目に値する。エジプトでは、革命に参加した若者は、男も女も、イスラム教信者もキリスト教信者も、教養ある人々であり、手製のプラカードを持参すると同時に、革命についての意思を共有する際に携帯電話やノートパソコンを使用する。この革命は完全に自生のものである。国際開発庁や他の国際機関がつやつやとしたプラカードやパンフレットを提供したり、5つ星ホテルでワークショップが開かれたわけではない。まったく対照的に、硬化した体制支持者は、馬やラクダ、レンガ、ナイフ、棒きれをもって集まった。

アラブ諸国の革命においては、アラブ - イスラエル間の軋轢が不在だったわけではない。エジプトとチュニジア両方の体制は、いわゆる「穏健派の枢軸国axis of moderation」の一部であり、両国の体制における穏健派を、イスラエルの植民計画やガザの包囲攻撃に対する青信号としてみる国民の感覚からはまったく奇妙にうつる政治言説をもっている。驚いたことには、al-Ahramなどの政府系の新聞においても、イスラエルが東エルサレムで4つの建物を破壊し、3人のパレスチナ人を殺害したガザ爆撃の翌日の1月4日に、ムバラクがネタニヤフに応接したことに対する非難がみられた。

そのようなわけで、革命にはイスラエルに対する嫌悪も根付いている。新しいアラブ諸国の体制は、大衆的正当性をもっており、体制を支持する西洋諸国の力を要請することがないだろう。おそらく、エジプトは、イスラエルの植民計画に抵抗するパレスチナ人の意思を強化する汎アラブ主義のリーダーとしての地位を再構築するだろう。インタビューでは、抗議する人々が、旧政権下で否定されてきた「尊厳」という単語を繰り返し使った。こうしたアラブ諸国の革命は、どのような社会運動がアラブ諸国で出現し、内外のアクターが相互作用しているかについて考える材料を与えてくれる。

> Actors of the Social Movement 社会運動のアクター

これらの革命では2つのグループが決定的な役割を果たした。第1に、教養のある無党派の若者が、伝統的にこうした社会運動に必要な機運や動員をもたらしてきた政党や労働組合と巧みに連携した。第2に、労働組合のメンバーであるかどうかに関わらない労働者階級の存在である。多くの識者は、意図的かどうかはわからないが、後者の重要性を見逃し、若者を階級をもたず特定のイデオロギーに拠らないものだと根拠なく示す。実際は、チュニジア、エジプトにおける革命は、社会階級に基づいた古典的様式と、市民権を求める闘争が広まった新しい様式とが合体した、社会運動の出現を示している。彼らは、労働者階級のアイデンティティに加えて、再帰性の力を借りて、トゥレーヌが言うコミットメントと中立である、社会の統合と分解の間の余白に自分たちのアイデンティティを創造しているのである。たとえば、4月6日運動以降の何人かの活動家は、ムスリム同胞団のメンバーであるが、同時に同胞団の行動とそれが旧体制との対話にいかにか早く入ってしまったかを批判していた。

チュニジアでは、Mohamed Bouaziziの行為が、最初は未組織で同時発生的な出来事として、その後すぐに労働組合によって引き継がれ、民衆蜂起の火付け役となった。チュニジア労働者一般組合は、体制との交渉力があり、チュニジア北部、特に首都では、南部の組合が反発する中、組合のリーダーが体制側と交渉をすすめていた。法曹協会も、若者から全年齢層に、地方から首都チュニスに抗議の輪を広げることに重要な役割を果たした。エジプトからパキスタンに及ぶアラブ・イスラム世界の社会運動における弁護士、裁判官の突出した立場は注目してよいだろう。

エジプトにおいては、革命は、Al-Mahalla al-Kubraにおける労働者ストライキと連帯した若者による4月6日運動によって開始された。彼らは、1月25日に何千ものデモ参加者を動員するために、フェイスブック、ツイッター、SMSを利用した。また、反体制派の力を借りて、カイロのタハリール広場、アレクサンドリア、スイス、ザカジク、マンスールなどでの何百万人もの抗議行動に至った。デモ参加者それぞれが携帯電話をもち、国の弾圧を記録し、それによって公的メディアを通さないレポーターになった。たしかに我々は、政治的市民的権利の要求が特定のイデオロギーに基づいた要求にとって代わる革命の時代にいる。一部のアラブや西洋の学者、ジャーナリストと同様、アラブの政治体制は、アラブの住民は政治的なイスラム勢力によってしか動員されえないと考えていた。チュニジアとエジプトの事例は両方とも、イスラム勢力は重要であったものの、彼らのみで革命が成功したのではなく、むしろ他の反対勢力との連

>>>

携が必要だったことを示している。イスラム勢力の強みは、他の反対勢力との連携によって、「イスラム教こそ解決策だIslam is the solution」というシンプルなスローガンを超えて、自由・民主制に向かったところにある。

しかし、人権機関、市民組織、非政府組織(NGO)はどうだったか。多くの資金援助提供者や国際機関は、これらが変革の風を運ぶものだろうと考え、市民団体をこれらの「非政治化された」機関に限定して考えている。これらの機関は、シンジケートや反対勢力に対して補助的な役割を果たし、公式、非公式の両面において、反体制の立場を取るべく、負傷者や死者数に関する情報を広め、国際社会の協力を要請した。それゆえ、市民団体の最も重要な特徴の一つは、シンジケート、政党、非政府組織の間の相乗効果であった。NGOのみに注目してきた資金援助提供者にとっては、NGO組織の膨張を防ぐためだけでなく、NGOにフレッシュな才能を提供するシンジケートや政党を強化するために、これらのすべての機関に援助を広げるべきときである。

東欧、中欧の革命のときと対照的に、これら2つの革命では、統一された反対派の指導部が存在しない。むしろ、時間がたって改善されたものの、指導者をもたない革命、組織なしのばらばらな状態がみられた。マスメディアは、特にチュニジアとエジプトの国営テレビが民衆にまったく誤った情報を伝えたときは特に役に立たなかったが、それでも人々に何が起きているかの情報は伝えた。1月26日、エジプトのテレビは、通りで何も起こっていないかのように、料理番組を放送した。Al-Jazeera、BBC Arabic、France 24などでは、活動家から携帯電話を通じてテレビ局に送られた映像を流し、情報、分析を提供した。私は、Al-Jazeeraが、アラブ内の問題における「不干渉の原則principal of non-interference」をひるがえし、アラブ民衆の抗議との「連帯solidarity」の立場に転換したことを強調しておきたい。

> What Next? 次は何か?

最後に、この素晴らしい民衆蜂起が、民主化に向けたプロセス(民主化へのプロセスには地雷敷設域がたくさんあるが)の出発点となることをただ願うばかりである。どんなことをしても、人々は、もう独裁者の下での安定・安全と、イスラム過激主義の危険との間の単なる二者択一には到底納得しない。毛沢東の古い標語「天下には大いなる混沌があり、そしてその状況は素晴らしいものである」が的を射ている。今後すぐには、多くの困難な局面があり、そしてチュニジア、エジプト両国において権力を得た軍とも交渉を重ねることを、我々は予期しなければならないだろう。

(高見具広訳)

> History Corner ヒストリー・コーナー

by Jennifer Platt, ISA Vice-President for Publications
ジェニファー・プラット (ISA副会長・出版担当)

役 員会が年次大会をメキシコシティにて、さらにメキシコの役員たちによるセミナーという特典を加えて、開催する(3月21 - 25日)準備をしているので、メキシコにおけるISAの歴史について今回のニュースレターに書くことは適切であろう。ラテンアメリカは、1990年代まで、全体でもISA個人会員の約4パーセントを占めるに過ぎなかったが、今やリサーチ・コミッティや役員会でも大きな割合を占め、特に役員会に至ってはほぼ常にラテンアメリカ出身者がいるほどである。ジーノ・ゲルマニGino Germani(アルゼンチン出身、1962-6年の副会長)とフェルナンド・カルドーゾFernando Cardoso(ブラジル出身、1982-6年の会長)は特に著名である。しかし、メキシコを拠点とする最初の会員は、フランシスコ・サパタFrancisco Zapataというチリからの政治亡命者(1978-82年)であり、彼はかつてパリで共に学んだアラン・トゥレーヌから推挙されたという経緯を持つ。次に挙げられるのは、1994-8年のホルヘ・ゴンザレスJorge Gonzalezである。

特筆に値するのは、1982年の世界社会学会議がメキシコシティという、第三世界に属する国で初めて開催されたことである。ISA会長職にあったウルフ・ヒンメルストランドUlf Himmelstrandの下で「社会学理論と社会的実践」が共通テーマとして掲げられたが、その際の開催地委員会はメキシコ国立自治大学のゲラルド・エストラダGerardo Estradaが率いた。参加者数は想像をはるかに超える多さであったので、プログラムを緊急増刷する必要に迫られたほどであった。そしておそらく、さらに重要なことは、顕著な効果をもたらした参加者が正規に参加登録をした者ばかりであったわけでないことである。

現地の学生はその世界社会学会議の形式および内容両方に強く反対を唱えた。大会プログラムは、メキシコにおける問題を扱ったものがわずかししか掲載していなかったが、それらの問題とは、対ドル通貨引下げと銀行の官営化に関する深刻なものであった。メキシコ社会学の多くは、研究に対して純粋に学問的探究をすることと同じくらいに政治的活動をも志向していたので、そのような問題に注目し損ねたことは強く批判された。この要求に応えるために、公式プログラムに加えて、即興で作られた組織によってたくさんのセッションがメキシコ人報告者やトピックを迎えて、同じ建物内で行われた。また、大会のほぼ全体が英語でなされたことも批判の対象となった。プレリナリー・セッションにおいて行われた大きなデモは、(当時は未だISAの公式言語ではなかった)スペイン語への翻訳を要求し、横断幕のひとつには「セルバンティスは可、シェークスピアは否」というスローガンが掲げられていた。また他のセッションも同様に、この要求がつけつけられて中断された。ISAの財政は当時(そして今も)、プレリナリー・セッション以外でプロの同時通訳者を雇える状況ではなかったが、セッションのいくつかでは学生が通訳を買って出ってくれる場面もあった。(アーサー・マイヤーArtur Meierが後に国会への報告書の中で、これら一連のデモは単に言語衝突ではなく、帝国主義的なアメリカ合衆国の覇権拡大に直面した状況下での国民文化的アイデンティティの主張であったのではないかと示唆していた。)同じような抗議が1990年に世界社会学会議がマドリッドで開催された際もあり、そこでついにスペイン語はISAの公式言語となったのである。

(芝里真訳)

> Solidarity With Japanese Sociologists 日本の社会学者たちとの連帯

ISA理事会は日本で起きた恐ろしい地震と津波、そして原発事故による犠牲者に心より哀悼と連帯の意を表します。私たちは、日本の人々がこの未曾有の悲劇に不屈の精神と新たなる団結の精神で立ち向かい続ける、と信じています。私たちは、日本の社会学に対し、いかなる献身をも惜しまないこと、特に2014年に横浜で開催される世界社会学会議が成功裡に終わるよう支援することをお約束したいと思います。この大会が日本社会学会の100年に渡る活動の総括となるものと私たちは理解しています。このように大きな不安と苦悩を抱えている時に、日本社会学会から2名——会長である矢澤修次郎教授、そして2014年大会の地元開催委員会委員長の長谷川公一教授——が、先般メキシコ・シティにて開催されたISA理事会に参加されたことに、私たちは深く感謝申し上げます。その際、長谷川先生が報告された内容をここに全て掲載いたします。

(芝真里訳)



防災センター
(写真提供:長谷川公一)

日本北東部の美しいリアス式海岸に沿って、津波は全ての漁港を破壊し、木造建築物を押し流し、鉄骨構造物のみを残していった。この荒廃した南三陸町の写真に見られるのは、3階建ての町立防災センターである。3月11日には30人以上の職員が勤務していたが、そのうち町長を含む8人が屋上より奇跡的に救出された。他の職員は亡くなってしまったが、その中には地域無線システムを通じて避難指示を放送する職務に就いていた若い女性もいた。彼女の声により多くの人々が助けられたが、彼女は津波に流されていってしまった。新たに設置された送電用鉄塔は日本の再建に向けた希望と決意へ高まる士気を表している。

(芝真里訳)

> Yokohama The Harbor of Hope

横浜を「希望の港」にしよう

by Koichi Hasegawa, Tohoku University, Sendai, Chair of Local
Organizing Committee for 2014 World Congress of Sociology,
Yokohama

長谷川 公一(東北大学大学院文学研究科教授;世界社会学会議2014年
横浜大会組織委員会委員長)

3月11日の午後、壮絶な地震と津波が日本の北東部の太平洋岸を襲いました。私の住む仙台市は、今回の地震被害がもっとも大きかった地域の一つです。幸い家族も私も無事でした。地震が来たとき、ちょうど世界社会学会議の予算案を検討していました。のどかな金曜の午後は突然暗転しました。これまで経験したことのない大きな揺れに、私も、家族も、地域全体が襲われました。本やファイルがほとんどみんな落ち、1mの高さに積み上がりました。2週間後の今でも、起こったことが信じられません。まるで映画の1シーンのようです。

サンフランシスコやロサンゼルスと同様に、日本は何度も地震を経験してきました。日本は4つのプレートの境目にありますから、日本の歴史は、地震の歴史ともいえます。人びとは、大きな地震が来ることを予期し、備えてきました。しかし5分足らずの間に大きな地震が3つも連続して来るとは誰も予想していなかったのです。マグニチュード9.0の地震から、予想をはるかに上回る早さで巨大な津波が生じ、想像を絶する惨状となりました。

しかし世界史上4番目に巨大な地震であったこと、日本社会の人口密度の大きさを考えると、被害は比較的少なくてすんだのです。地域社会は住宅の耐震化をはじめ防災に取り組んできました。学校も、近隣も、地震と津波に関する防災訓練をふだんから行ってきました。

これまでのところ、暴動や略奪などが報じられていないことを誇らしく思います。最悪の被害のあとも、もっとも影響の大きかった地域でも、首都圏でも、人びとは落ち着いて行動し、きちんと行列をつくって食糧や給水を待ち、交通機関の遅れを忍びました。多くの外国の記者が、日本文化の特質である秩序の感覚が、この破局的な危機のさなかにも保たれていることに感銘を受けています。

沿岸部を中心に既に1万人近い死者が報じられ、2週間後の今なお、1万6千人以上の人びとが行方不明です。この地震と津波は、近代日本史上最悪の自然災害となりました。

もう1回チェルノブイリのような事故が起きないと、日本はエネルギー政策を転換できなかったのでしょうか

福島原子炉の事故についても、憂慮されてなりません。環境社会学者であり、社会運動の研究者である私は、原発一辺倒の日本のエネルギー政策を全面的に批判してきました。1996年に、エネルギー政策を批判する『脱原子力社会の選択』という本を出版しました。この本は、日本政府に、原子力推進政策の転換を求めたものです。講演を求められると、私はよく次のような問いを投げかけてきました。「もう1回チェルノブイリのような事故が起きないと、日本はエネ

ルギー政策を転換できないのでしょうか」。15年前からのこの警告は、とうとう現実になってしまいました。日本政府は、スリーマイル事故、チェルノブイリ事故、その他の原発事故から学習することを怠り、教訓に目を閉ざしてきたのです。残念ながら、無力感とむなしさを否めません。

> Our Venue is Safe Against earthquakes

大会会場は地震に万全の備えをしています

みなさんは、2014年の世界社会学会議のために日本に出かけて大丈夫なのか、心配しておられることでしょう。しかし私の話をお聞きいただければ、2014年の大会までに復興した日本を訪れたいはずですよ。日本社会は何度も破局を乗り越えてきました。1923年の関東大震災、1945年の東京大空襲、広島・長崎の原爆、最近では1995年の神戸の震災です。

横浜市も、会議場のパシフィコ横浜も、近年大きな地震被害を受けておりません。今回の地震のあと横浜市に確認しましたが、市内の主要な建物は巨大地震に備えて防災対策を施しており、定期的に点検もしています。会場のパシフィコ横浜は完全に耐震設計されております。横浜の津波被害は聞いたことがありません。横浜港に小さな津波が来たのは、開港から152年の歴史の中で、わずかに1回だ

>>



世界社会学会議2014年横浜大会組織委員会委員長である長谷川公一教授

けです。そのときも被害は全くありませんでした。横浜の湾の形状は、津波を受けにくいのです。横浜市も人びとも、地震に対する備えと対策を怠っていません。

> The Japanese LOC Will Do Its Best 日本の組織委員会は全力を尽くしています

日本の組織委員会は2008年6月に発足しましたが、本当の意味でナショナル・チームです。委員17人は全国各地から集まっており、さまざまな研究分野をカバーしています。国際社会学会理事会、日本社会学会と協力しながら、これまでで最高の世界社会学会議になるよう全力で取り組んでいます。ヨーテボリ大会の経験や教訓にも学んでいます。パシフィコ横浜では、1つの敷地内に2つの建物が隣接し、そこに分科会用に計80室分を用意します。どの会場間も、徒歩で10分以内で移動できます。

日本の組織委員会は、次の5つのテーマ・セッションを準備しています。

1. 自然災害／人的災害と地域社会の再建
2. 少子高齢社会とジェンダー関係の変容
3. 市民社会———市民社会組織、NGO、社会運動
4. 圧縮された近代化とグローバル化———東アジアの視点から

5. 社会調査と社会学教育

これらは会議全体のテーマ「不平等な世界と対峙する」と密接に関連しています。また東アジアの視点を重視し、韓国・中国・台湾の社会学者と協力しています。

> Make Yokohama the Harbor of Hope 横浜を「希望の港」に

パシフィコ横浜は「みなとみらい」地区にあります。「みなとみらい」は、希望の港をも意味します。横浜は長く東西交流の拠点であり、北東アジアと南東アジアの接点であり続けてきました。アジアとアメリカの架け橋となり、アジアの北と南を世界と結びつけてきたのです。航空路が主流となるまでは、アジアを旅立つ若者にとって希望の港でした。成功を夢見て、横浜から日本に入国した者も大勢いました。現在横浜は日本のグローバル・シティであり、多様で多彩で、ダイナミックな姿を生き活きと示しています。エスニックな多様性をもとに、日本社会の固定的なイメージをのりこえようとしています。

気がかりなのは、登録参加者数です。ヨーテボリ大会のように5000人の参加を目標にしましたが、巨大地震と原発事故からくるネガティブなイメージによって、参加者数が減るのではないかと心配です。

しかし、みなさんは、「安楽椅子の社会学者」ではないはずです。果敢に社会の現実を直視する、勇気ある社会学者のはずです。3年後の2014年に横浜に行こう、と研究仲間、友人、大学院生につよく勧めてください。たくましく再建した日本社会の姿を凝視し、体験してください。日本を訪れ、横浜大会に参加することが、日本の社会と日本の社会学に対する何よりの応援です。是非、自分の目で、日本の人びとと文化を直視してください。2014年、復興した日本の姿を五感で味わい、感じてください。

横浜を、再び「希望の港」にしようではありませんか。不平等な世界と果敢に対峙し、オールタナティブと持続可能な未来を求めてやまない社会学者が集う場にしようではありませんか。横浜大会は、あなたが主役です。

ご支援、ありがとうございます。
(長谷川公一記)

> An International Sociology With Diverse Epistemes 多様なエピステーメーからなる国際社会学へ

by Sujata Patel, University of Hyderabad, India
スジャータ・パテル(ハイデラバード大学・インド)

本誌『グローバル・ダイアログ』では、国際社会学のあり方についてとても興味深い対話が始められている。私はここで直接的にはウルリヒ・ベックが「コスモポリタン・ターン」のテーマで寄稿した2つの論文(GD 1.2と1.3に掲載)に対するコメントを試みて、それに関係する限りでレーウィン・コンネルの寄稿(GD 1.2に掲載)にも触れようと思う。ただし、このコメントは方法論的コスモポリタニズム、方法論的ナショナリズム、グローバル社会学の3つの考え方に集中して議論したい。

クレイグ・カルフーンが言うように、コスモポリタニズムは今流行のまっただ中にある。この言葉にはさまざまな意味や歴史が込められているが、ここではその共通した理解に基づいて話を進めたい。それは、どのような形態であれ「他者」を認識すること、あるいはこう言えば記憶を呼び起こしていただけるだろうか、Public Culture誌の2000年のコスモポリタニズム特集号に記されたように、「広大で変動する網の目の中で、相互性の特性の中に相互性の感覚そのものを着地させようという、切実なる欲求をつかまえ」ようにとすること。ベックが言うように「北と南の両立しがたい視界の両方を社会学的な分析の平面に載せる」ためには、この相互性と差異を認識することから始めるしかない。

私の問いはこうである。なぜベックの方法論的コスモポリタニズムは、南に属するさまざまな地域で試みられてきた社会学的学習のきわめて重要な経験を事実として受け入れないのだろうか。この問題はコンネルの著書『南の理論Southern Theory』で議論されただけでなく、世界中の南の学者たちの多くが議論してきた問題でもある。学術的依存academic dependencyという術語とともに議論されてきたこの現象は、教え方と学び方、カリキュラム、研究プロセス、ジャーナルや本に掲載される論文の査読基準、さらには出版する場所から学術的な洗練さが何であるかまで、さまざまなところに発見される。

学術的依存がここまで広がり続けている理由はどこにあるのか。植民地主義と知の形態の関係から始まって数多くのものがその答えとしてありうるが、サイード・フセイン・アラタスの言葉を使えば、「捕らわれの精神captive mind」にこそその理由がある。植民地主義が公式に消滅した現在でも、「捕らわれの精神」によって多くの研究者が近代性の理論群を探究し、それゆえ社会学へと導かれている。彼らはこう主張する。ヨーロッパと北米の社会学理論は自民族中心主義にすぎず、ヨーロッパを中心とみなすエピステーメーが「コスモポリタン」と呼ばれるべき真に包括的なディシプリンの発展を阻害していると。ヨーロッパ中心的な想像力は自らを自己イメージに沿うように理解することによっている。自らの成長を、近代的かつ合理的、さらには博愛的な精神をもつ主体を作り出したヨーロッパの啓蒙主義の中に位置づけられるものとみなし、その中で理性と科学を備えた主体が時空を征服し、それをもって人間の進歩の欲求を保証し、成し遂げる。そういう考え方だ。そこでは近代を、資本主義的な生産様式が流通機構たる市場とともに維持されている世界大の経済システムであると見なす

ようなことはない。実際にはそうした経済システムが、法を通して正統化された国家形態と国民国家システムという政治的な形成物によって、あるいは、その内外に走る階層、ジェンダー、人種、エスニシティといった社会的組織形態によって支えられているわけなのだが。余暇や善き生といった文化的な実践は本来そうした場の力学において実践されているはずだが、アリフ・ダーリックが批判的に言うところの「文化継承のプロセスculturalist process」のように、ヨーロッパ中心的な想像力は一連の現象をヨーロッパ内部的なもののみとし、自らの中心主義をそのまま具現化してしまっている。こうした自己イメージはヨーロッパ内発的な発展によるだけではなく、植民地主義的な、あるいは、帝国主義的な支配プロセスの絡まりあいを通して出現するものである。にもかかわらずヨーロッパの研究者は、この言説編成を植民地主義との相互的な関係においてではなく、ヨーロッパに内発的な歴史観と言語体系の域内において評価し、今もそうし続けている。そのため、ヨーロッパや北米における高次の、徹底化された、後期近代性のプロセスを説明する際にもこの位置づけ方が基本的に継承され、方法論的ナショナリズムの議論にも波及している。

> Methodological Nationalism 方法論的ナショナリズム

方法論的ナショナリズムの理論にとって特に重要な概念が二つある。空間spaceと場所placeである。理論家たちはこの二つの概念を分析的に分けて扱うように試みてきたが、概念的なあいまいさを伴って使われることも多い。多くの場合は、空間は社会的な相互関係を数的に数えることができる抽象的な言説空間として理解され、場所は社会関係が複合することで生み出される具現化された複数の場所、すなわち物理的な位置取りとして知覚されている。こうした場所の概念は長い時を経る中でその本来の意味からにじり出て、意識と象徴的な意味(たとえば都市の場合にはブエノスアイレス、国家の場合には南アフリカ)に結びついたアイデンティティをもつようになる。その上でさらに、こうしたアイデンティティは他の場所や領域に対抗するような連帯感をもたらしようになる。たとえば、国家レベルではマレーシアに対するシンガポール、国家を超えたところではオランダに対するインドネシアのように、より地域的な絆や連帯感(タハリール広場のような)をその都度活性化させながら、具体的な場所の意味空間を出現させている。

方法論的ナショナリズムは空間と場所の複雑なつながり方をうまく解きほぐせないでいる。特に、国家や国民性、ナショナリズムといった概念が理論構築と方法論の適用の両方の場面で社会科学の枠組みに悪い影響「だけを」与えると主張するときにはっきりと見えてくる。フランスやドイツのような旧支配国で社会学の「創設者」たちがディシプリンの正典を作り上げたが、そこでの主張が必ずしも全世界にあてはまるわけではない。というのも、国家やナショナリズムはインドのような旧植民地で展開されている議論に対

>>

してよい影響も与えているからだ。この入り込んだ状況を理解するためには、インドにおける社会学の成立史を吟味することが助けになるだろう。

インドで社会科学が発展し始めたころ、植民地主義が人類学的な理論や方法論を使ってインド社会を前近代社会として編み上げていったことを問題として浮上させた言語は、ナショナリズムの概念群であった。独立以前もそれ以後も、ナショナリズムのイデオロギーがあったからこそ、インド社会を外側から評定するものとして受け継がれてきた植民地主義の知の形態に疑問を投げかけ、内側から研究することが必要だと主張し、ヨーロッパ社会学の中で発展してきた理論群との対話に耐えうるだけの社会的な言語を作ることができたのである。移動の機会を作り出すために高等教育を利用する近代ナショナリズムが導入されたことで、そのナショナリズムに出自をもつ社会科学が、計画的な社会改革や社会発展を概念化するのに重要な役割を果たすこともできたのである。

それゆえインドの場合は、あるいは他の旧植民地国でも同じだと思うが、社会科学が用いてきた植民地主義の言説に直面した際のガイドラインを作るための場所あるいは領域として、意識的に取り込んだものが方法論的ナショナリズムであった。場所と同一化することで、ナショナルな知識人は植民地主義の支配言語に対抗する知的な連帯を作り上げることができ、その連帯が場所に結びついたものだと認識することで別の言語を成長させることができた。これこそが、政策と規制の全領域をまとめる知のシステムを制度化する原理原則になったものである。教え方と学び方、研究所の中で研究を実践すること、研究資金の配分、省察方法、職域の組織化と研究者であることの定義にいたるまで、そのプロトコルがこれによって定められた。

こうした系譜学は方法論的ナショナリズムの欠点と並行して議論、評価されるべきものである。ナショナリズムに出自をもつ社会学は旧植民地国から発せられるものとして、国際社会学の理解を狭めることなく、むしろそれを広げる役割を果たしてきた。世界を作り上げている多くの特異性を浮かび上がらせることで歴史的なプロセスを別の形で評価することができ、また、国際社会学を組み上げている不平等の在り処を示すこともできる。方法論的ナショナリズムは今や財産と呼ぶべきものであり、決して捨て去っていいものではない。

もちろんこれは、旧植民地国家のナショナリズムに出自をもつ社会学の枠内で「社会」を国民国家と定義されるような場所／領域に還元することが、方法論的にまったく問題ないことを意味するものではない。こうした社会学が、「ローカル」で「弱い」、あるいは「マージナル」なサバルタンの経験や声に結びついた場所を見過ごしてきたのは疑いえない。20世紀末の社会学が国家を超えるものを疑問に付したとするならば、その内部のローカリティも支配し普遍化していたのではないか。われわれはこう問わなくてはならない。世界中の多くの他者を沈黙させ、異なるエピステーメを組織化してきた支配と服従の問題含みで矛盾したプロセスを分析できる、そうした国際社会学をつくるためにはどのような種類の枠組みが必要なのだろうか。

“...Why does Beck's methodological cosmopolitanism not recognize one of the most significant experiences of sociological scholarship in the various regions of the south?...”

「なぜベックの方法論的コスモポリタニズムは、南に属するさまざまな地域で試みられてきた社会学の学究のきわめて重要な経験を事実として受け入れないのだろうか。」

> Global Sociology? グローバル社会学?

「理論的にも、経験的にも、方法論的にも、規範的にも、歴史的にも新しい、その基礎さえも切り崩していくような絡まりあった複数の近代を、社会政治理論はどのように切り開いていけばよいのだろうか？」とベックが問うとき、私はその問いの立て方に同意する。15世紀から今日にいたるまで複層的なプロセスによって作り上げられてきた、この相互に接続する資本主義的な世界システムを分析する上で、「絡まりあった複数の近代entangled modernities」という概念化が正しいものなのかどうかを議論することもできるだろう。しかしわれわれは、18世紀から今日に至るまで、特に社会学の言語を作り上げてきた表象形態、すなわち普遍的(ヨーロッパ中心的)／特殊的(旧植民地あるいはナショナル)という二項コードによる表象形態から離れて、先に進まなくてはならない。そしてそのときにはもう、言語においてもその意味においても、捕らわれの精神を作り出すような普遍主義的なエピステーメに頼ることはできない。

残念なことに、「コスモポリタン／コスモポリタニズム」あるいは「グローバル」という術語はヨーロッパ近代の中に長い歴史をもっており、その歴史と意味による負荷が色濃く残っている。そこで私は多様性diversitiesという言葉が好んで使われることが多い。というのも、英語を含む多くの言語において、その使われ方自体がきわめて多様であり、ただ差異を示すだけのときもあれば、エピステーメの創出に権力概念が中心的な役割を果たすと考えるような差異の存在論を構築する際にも使われているからである。また、象徴的には均質化よりは分散化を含意し、存在論においては複数のエピステーメを同一の平面に載せず、それぞれにおいて意味を発現させる効果をもっている。そのため、相互的な関係は損なわれず、相互性の特性それ自体によって編成され、その特性自体は権力の配置の中で空間／場所が複数的に運動することによって構築されるものである。互いに優劣はもたずに、それぞれが別個であり、多様であり、普遍的であるが、相互に接続している。多様性は、他とは異なる自らの社会学を、あるいは理論と実践を評価するために自らの理論群を、提示し明確にするのである。

今われわれが目指しているものは、社会学的な伝統の多くの声を損なうことなく、権力の配置を認識できる知的基盤と言語を作り上げることである。(池田和弘訳)

> Facing Inequality: An International Debate in Mexico City 不平等に立ち向かう:メキシコシティでの国際討論

by Raquel Sosa Elizaga, Universidad Nacional Autónoma de México, ISA Vice-President for Program
ラケル・ソーサ・エリザガ(メキシコ国立自治大学;ISA副会長プログラム部門担当)



UNAM不平等会議において、プログラム部門担当委員のゲラン・セルボーンによる報告模様

2011年3月21-25日の間にメキシコシティで行われた国際社会学会(ISA)の執行委員会のミーティングと同時に、メキシコ国立自治大学の政治社会科学部は、メキシコやラテンアメリカ、および他の国から著名な研究者を集めて不平等に関する討論を行った。ISA会長のMichael Burawoy, Rolando Cordera, Göran Therbornは講演の中で、不平等研究の射程や、社会科学におけるその起源と展開、および現代の世界に対するさまざまなインプリケーションについて探求した。

3つのパネルディスカッションでは、異なる国から来た18人の研究者が、不平等の理論に関する包括的な概観や、異なる社会や異なる文化での不平等の現れ方、不平等に対する異なる領域からの見方について発表した。我々は不平等が深まるリスクや組織されたコミュニティが不平等の問題にどのように取り組むことができるか、そしてコミュニティにおける不平等が最近30年間に劇的に悪化してきたことなどを議論した。

批判的な観点から、何人かの研究者は、我々は文明の岐路に立っていると主張した。つまり、天然資源を過剰に使用し、地球上の生命の再生産に影響を及ぼしかねないほどの環境破

壊が行われていると指摘した。戦争や水の奪い合いをもたらす災害に関する懸念からは、参加者全員が略奪の防止と人類という集合的存在を保護する真のオルタナティブを探すことに強い関心を示した。

どのセッションにおいても、このような複雑な現象は、人種差別や女性に対する暴力、コミュニティのニーズに対する無知と無関心、文化的多様性の否定、新たな集団や階級の登場などのさまざまな不平等と重なりあっていることが認識された。我々はインド、南アフリカ、メキシコ、ラテンアメリカの国々、レバノン、日本、アラブ首長国連邦、アメリカ、スペイン、フィリピン、スウェーデン、フランス、ロシア、イギリスなど多様な国の不平等について報告者から話を聞くことができた。彼らの報告は、異なる文化的背景では、不平等は異なる意味と程度を持つということの有益な例を示していた。これらの事例に触れることで、我々は不平等を説明するだけでなく、不平等をもたらす問題や、不平等に打ち克つための提案について再考することができた。

最後に、我々の議論では、ジョン・ロールズJohn Rawlsやアマルティア・センAmartya Senによるものから、ゲラ

ン・セルボーンGöran Therborn, デヴィッド・ハーベイDavid Harvey, ピエール・ブルデュPierre Bourdieuによるもので、幅広い正義の概念が提示された。不平等と排除、不平等と暴力、不平等と権力関係、および公共空間組織に対するそれらの影響の関係を理解することによって、特定領域の限定的なパースペクティブには限界があることが明らかになった。このような状況において、公的な議論に対して影響を与えることができるような社会学が世界的なレベルで求められているのである。

今回の集まりは、今日の世界の不平等問題を考える一連のフォーラムやワークショップ、セミナーの第1回目であった。この議論は2012年にブエノスアイレスで行われるISAのフォーラムや2014年の横浜国際会議でも引き続き行われる。ここでの議論は社会学が進むべき新たな方向を提示するものとなるはずである。

(塩谷芳也訳)

> Executive Committee Meeting in Mexico City, March 21-25, 2011 2011年3月21日～25日 ISA理事会議(於:メキシコシティ)報告

by Michael Burawoy, University of California, Berkeley and ISA President
ISA会長 ミシェル・ブラオイ(カリフォルニア大学)



ISA理事会の面々。理事会が行われたUNAM(メキシコ・シティ)の美しい庭園にて。

以下はISAの副会長たちによる、各会議の報告の概要です。

Margaret Abraham (ISA副会長: 研究担当)

研究調整委員会(RCC)はメキシコシティにおいて、実り多い会合を行うことができました。今回の会議は、ヨーテボリ大会で開かれた前回のRCC会合で生じた問題を扱うためのものでした。この会合では、RCの目標と要求をインターネット上に明示すること、RCを設立するのに必要な正会員数の基準を25人から50人に増加させること、ワーキンググループ(WG)を設立するには正会員を25人必要とするものの提案を承認しました。Margaret Abrahamは、前回大会でのRCやWG、主題別グループ(TG)の議論に基づく報告と、2012年のブエノスアイレスでのフォーラムに向けた計画について報告を行いました。研究調整委員会は、これらの報告と、RC51での役員選挙を含む各RCの関連事項について議論を重ねました。また(1)「制度のエスノグラフィ Institutional Ethnography」と(2)「意味と社会 Senses and Society」という2つの新しいTG設立の提案がなされ、前者が承認され、後者は審議継続となりました。残りの会合時間の大部分は、ISAの2011年度RC研究助成金に関する審議と承認にあてられました。

Jennifer Platt (ISA副会長: 出版担当)

ISAの機関誌は、投稿論文数・発行部数・引用数ともに増加しており、とても好調です。しかし、編集者の作業量もまた増加しており、またいくつかの財政的な援助もなくなったことから、現在の(一定程度成功をおさめた)状況は、寄付の増加によって支えられていると言えます。各種の取り組みは、デジタルコンテンツにアクセスする際に、それぞれの地域の問題に合わせ、必要に応じて柔軟に行われます。特に、2014年の横浜でのISA世界大会

>>>

UNAM(メキシコ国立自治大学)学長でありメキシコ社会学会の会長でもあるFernando Castañeda Sabidoと、ISA副会長(プログラム担当)Raquel Sosa Elizagaの両名の協力を得て、UNAMをホスト校として、5日間にわたるISA理事会が開催されました。5日間の長丁場は、まず、丸一日を要したプログラム委員会の会合にはじまり、続いてJennifer Platt副会長が議長をつとめた出版委員会の会合、Robert Van Krieken副会長が議長をつとめた財政人事委員会の会合、Tina Uys副会長が議長をつとめたNA間協力委員会の会合、Margaret Abraham副会長が議長をつとめた研究調整委員会の会合が開かれました。

ISA理事会は週末の丸二日間を要し、それと並行して「不平等との対決——現代世界への挑戦」と題された、横浜でのISA世界大会に向けたディベートを行う会合も開催されました。この会合にもISAとメキシコ社会学会から多くの社会学者が参加し、盛況なものとなりました。

2010年にヨーテボリで開催されたISA世界大会でISA会長に選出されて以降、私はさまざまな国を訪れ、ISAから年6回発行されるニュースレター

「Global Dialogue」を9ヶ国語に翻訳し、Sociotubeにおいてストリーム放送「Global Sociology, Live!」を行い、さらにはISAの公式ブログ「Universities in Crisis」を開設するなど、デジタル世界での新たな展開を実施してきました。これらの取り組みは好評をもって迎えられ、現在ではISAのFacebookも多くの閲覧者を得ています。こうしたデジタル世界において、若い社会学者たちが国境を越えて結びつき、協力しあうことの重要性を、私は強く訴えています。

こうしたデジタル世界を構築することの目的は、ナショナル・アソシエーション(NA)、リサーチ・コミッティ(RC)、一般会員と役員会との関係を、より開放的で透明なものにすることです。そこで我々は現在、役員会の主な決定を年次報告するものとして、このような「Global Dialogue」などで我々の進捗状況を報告することにしました。また、私たちは「利害衝突」の認識を含む、各種の意志決定と考慮すべきことがらに関して議論を重ねました。

その議論において我々は、社会学者の人権問題、若手研究者問題、ISA賞、ISAと他の国際機関との連携などを扱ういくつかの小委員会の設立について合意を得ることができました。

に向けて、北東アジアの研究者によって書かれた論文の翻訳の巻が計画されています。

また、次号の「International Sociology Review of Books」編集に関して、〆切までに応募された投稿論文はまだ揃っていないため、〆切を延長し、投稿資格者をもっと増やすことで合意を得ました。「Current Sociology」の編集者は、投稿者になりうる研究者とのワークショップや、「Meet the Editors」と呼ばれるセッションを開催しました。このような活動や投稿者のトレーニングが、できるだけ多くの会議で実施される予定です。

Raquel Sosa (ISA副会長：プログラム担当)

横浜での2014年ISA世界大会に向けて開催されたプログラム委員会の会合には、各RCとNAの会長と副会長、4名の役員、Local Organizing Committeeの議長、異なる専門分野と地域を代表するべく選ばれた6名の研究者が出席しました。この会合の議長はRaquel Sosa (ISA副会長：プログラム担当)がつとめました。

この会合の主要な議題は、横浜世界大会での本会議や「author meets critics」セッション、統合セッションなどについて話し合い、「Facing an Unequal World: Challenges for a Global Sociology」のテーマに沿ってプログラムを作成することでした。

最初の会合では、プログラム委員会が、全体のスケジュール決定と、4つの本会議のテーマ決定を行いました。テーマは「Multidimensional analysis of inequality」「Dynamics of inequality」「Issues of justice」「Alternative ways of overcoming inequality」の4つです。これらのガイドラインがRCやNAを刺激し、「不平等」という現代世界の切迫した問題に取り組むとともに、学術的に実り多い交流がなされることを期待しています。

Tina Uys (ISA副会長：NA担当)

NA間協力委員会(NALC)は、団体正会員の応募と、地域ごとの会合に対してNAから支払われる助成金について話し合いました。アルゼンチン、バングラデシュ、アイルランド、レバノン、モザンビークの社会学会からISA会員への応募があり、承認されました。NALCのメンバーは、新入会員と協力・連携することを確約しました。

NALCは2種類の助成金について、その募集要項を明確化することが重要だと考えています。webサイト運営に対するNALCの助成金は、各NAがwebサイトを新規に立ち上げる際に優先的に支払われるもので、webサイトの更新に対しては優先度が低くなっています。地域ごとの会合に対して支払われる助成金の目的は、国境を越えて社会学者たちが連携し、ワークショップを開催することを支援することです。上記の2種類の助成金は、カザフスタンのNAと、スペイン・ポルトガルの両NAが開催するジョイントワークショップに対して支払われることが決定しました。これらの助成金が支払われた活動に対しては、来年度の役員会議までに進捗状況報告書を提出することが求められます。

NALCの2013年会議を招集する提案は承認され、すべてのNAに通達される予定です。また、次回会議のテーマに関する議論が行われました。最終的に、NALCは各NAに経済的なサポートを行ううえで、それぞれのNAの歴史や会員の状況、活動状況などを調査することを決定しました。

Robert Van Krieken (ISA副会長：人事財政担当)

2011年3月22日に開催された人事財政委員会の会合と、同25日に行われた役員会議の報告です。会員数の問題については、ISAが定めている経済水準A・B・Cの国カテゴリーごとに正会員の会費に差異をつけること、B・Cカテゴリーの国からの会員数が増加していることなどの問題を含めて、2012年の次回役員会議で会員資格小委員会が報告するように求められました。

NALCが実施しているように、人事財政部門も、団体正会員の受付を行っています。まもなく開催予定の2つの大きな会議——2012年ブエノスアイレスでのISAフォーラムと、2014年横浜での世界大会——についての取り決めと予算について、議論が重ねられました。

会合では、ISAへの入会時か会員資格更新時に、ISAへの寄付を行うように明示する条項を作成することが決定されました。2011年度の予算案は、NAやRCからの、また「Global Dialogue」のためのISA会長からの、そして出版委員会からの助成金のための申し出を顧慮して、修正が行われました。

最後に、要求に応じて会員が利用できるようにする2010年の予算概略が認められました。

その他

その他、国連に派遣した使節 (Jan Fritz, Rosemary Barberet and Rudolf Richter)、国際法社会学会に派遣した使節 (Ramon Flecha and Benjamin Tejerina)、Global Development Networkに派遣した使節 (Emma Porio)からの報告を受けて議論を行いました。また、Tina Uys副会長から、ヨハネスブルグで行われる予定のPhD学生による研究会の進捗状況について、報告を受けました。さらに、2014年横浜での世界大会に関して、日本の社会学者たちに向けてのメッセージを送りました。この大変な会議を開催するにあたって、今回のホスト校の手厚い歓迎と、ISAスタッフの努力に感謝の意を表して、この記事を終えます。今後もISAは、より多くの会員とともに、より豊富な活動を行うべく、歩みを進めて参ります。

(姫野宏輔訳)

> Without Borders 国境のない世界

by Judith Blau, University of North Carolina, President of US Chapter of *Sociologists without Borders*
and Alberto Moncada, President of *Sociologists without Borders International*
ジュディス・ブラウ：ノースカロライナ大学、「国境なき社会学者」アメリカ支部代表
アルベルト・モンカーダ：「国境なき社会学者インターナショナル」代表

国境なき医師団は、言うまでもなく、グローバリゼーションによって勢いを増した「国境なき～」運動の最前線であった。以下の例は、包括的なものではないが、「国境なき～」運動が広い範囲に渡って行われていることを示唆している。たとえば、国境なき建築家、国境なき道化師、国境なきエンジニア、国境なき農業者、国境なき僧侶、国境なき音楽家、国境なき記者団、国境なきサッカー、国境なき教師団などである。

「国境なき社会学者」(SSF: *Sociólogos sin frontera*)も、広範に渡る「国境なき～」運動の一環である。SSFはスペインで2002年に設立された後、ブラジル、チリ、イラン、イタリア、マレーシア、プエルトリコ、アメリカなど他のさまざまな国に広がっている。他の「国境なき」組織と同様に、SSFの綱領は、平等および人びとが世界レベルでの責任感を互いに持ち合うことを強調している。さらに人権や参加型民主主義、公正な経済、持続可能な環境システムの重要性についても焦点を当てている。SSFは帝国主義やネオリベラリズムに対して批判的である。SSFのメンバーは、マイケル・ブラヴォイによって提唱された「パブリック・ソシオロジー」に向かう社会学の変化を特に望ましいことだと考えている。

社会学はゆっくりと、そして確実に変化しつつある。2、30年前は、少なくともアメリカでは、実証主義的かつ合理的な考え方が大学や研究の場での支配的な考え方となっており、それら

が疑問視されることはほとんどなかった。この状態は1970年代にフェミニストの観点(アメリカでは「社会における女性のための社会学者連盟」: *Sociologists for Women in Society* -SWSによって)およびアフリカ系アメリカ人の観点(アメリカでは「黒人社会学者協会」: *Association of Black Sociologist* -ABSによって)から変わり始めた。アメリカ社会学会(ASA)のマルクス主義部門のメンバーは、より大きな見取り図を常に我々に想起させていた。ASAの新しい部門、たとえば「エイジングとライフコース」「利他主義」「道徳と社会的連帯」「子供と若者」「障害と社会」「教育」といった部門は、明らかに価値中立的ではない。子供に関する研究をしている人びとが子供の福祉に関心であることを想像するのは難しいし、彼等の中には子供の福祉を積極的に擁護する人びとがいることはとても自然なことである。すなわち、パブリック・ソシオロジーはアメリカのさまざまな領域に広がってきている。

SSFのアメリカ支部は、アメリカの社会学においてどのような役割を果たしてきたのであろうか。第1に、我々は世界的なレベルでメーリングリストや議論の場を設けてきた[<http://ss-fthinktank.org/>]。第2に、我々は「科学の進展のための人権連合(Human Rights Coalition of the American Association for the Advancement of Science)」の顧問団の委員をしている。これはASA部門では不可能であったことである。第3に、我々は世界社会フォーラムに組織として参加している。これもASA部門では不可能で



SSF代表のジュディス・ブラウ。

あったことである。第4に、我々はASAに対して「ロビー活動」を行うことができる。これももちろんASA自身には不可能なことである。我々の決議のうちの2つ、すなわち人権に関する声明と、世界中の危険に晒されている社会学者の権利を保護するための声明は、ASA評議会によって承認された。我々は『国境なき社会(Societies without Borders)』という機関誌を持っている[<http://societieswithout-borders.org/>]。この雑誌は、我々の考え方に合わせてオープン・ソースとしており、誰でも読むことができる。

我々の組織が自由であり、ASAから独立している(ASAの友人ではあるが)ことには大きな利点があり、また「国境なき～」という我々の考え方とも一致している。我々は他の多くの社会学者に同調することなく、彼らが取っているのとは異なる立場を取ることができる。我々は、南部諸国へのお金や資源の自由な流れを擁護することができるだろうか。もちろん、可能である。帝国主義やヘゲモニーに反対することができるだろうか。もちろん、できる。民営化を終わらせることに貢献できるだろうか。確実に、できる。人びとの自由な移動、国境なき往来が必要だと主張することができるだろうか。絶対に、できる!

(塩谷芳也訳)

> Editorial Board

編集長: Michael Burawoy.

編集主任: Lola Busuttil, August Bagà, Genevieve Head-Gordon.

編集委員: Margaret Abraham, Tina Uys, Raquel Sosa, Jennifer Platt, Robert Van Krieken.

顧問編集委員: Izabela Barlinska, Louis Chauvel, Dilek Cindoglu, Tom Dwyer, Jan Fritz, Sari Hanafi, Jaime Jiménez, Habibul Khondker, Simon Mapadimeng, Ishwar Modi, Nikita Pokrovsky, Emma Porio, Yoshimichi Sato, Vineeta Sinha, Benjamin Tejerina, Chin-Chun Yi, Elena Zdravomyslova.

地域編集委員

アラブ諸国: Sari Hanafi and Mounir Saidani.

ブラジル: Gustavo Taniguti, Juliana Tonche, Pedro Mancini, Fabio Silva Tsunoda, Dmitri Cerboncini Fernandes, Andreza Galli, Renata Barreto Pretulan.

インド: Ishwar Modi, Rajiv Gupta, Rashmi Jain and Uday Singh.

日本: 西原和久(日本語版翻訳監修), 芝真里(日本語版編集事務局幹事), 塩谷芳也, 姫野宏輔, 高見具広, 池田和弘, 岩館豊, 速水奈名子

スペイン: Gisela Redondo.

台湾: Jing-Mao Ho.

> Celebrating 20 Years of The Turkish Sociological Association

トルコ社会学会20周年を祝う

by Birsen Gökçe, President of the Turkish Sociological Association.¹

ビルセン・ゴルチェ(トルコ社会学会会長¹)



TSA20周年を記念してトルコの社会学者を前にスピーチを行ったビルセン・ゴルチェ会長

社会的問題に関する社会学的調査を通じて組織されたアナトリア周辺の大学の社会学部との密接な連携である。会議は、年配の教授と若い教員、国のさまざまな部局から来た同僚、方法論の近い研究者仲間と、考え、見解、知識を交換するための土台を提供する。

最初の会議は「現在の社会学の展開」についてであり、学会設立から3年後、1993年にIzmirのEge大学で開催された。第2回目は、「人口移動」について、1996年にMersin大学で開催された。第3回目は、「世界とトルコにおける新しい社会学的挑戦」についてであり、疎外、コンフリクト、統合といったトピックを重視した。それは2000年にEskişehirのAnadolu大学にて開催されたが、「変化する世界と不平等」に関する4回目の会議は、SivasにあるCumhuriyet大学で行われた。第5回目の会議は「トルコにおける現在の社会問題」をテーマとして、2006年にMalatyaのÜnönü大学で開催された。2009年の最後の会議は、「社会変容と社会学的アプローチ」に関してAdnan Menderes大学において開催された。

当初、社会学は哲学部で教えられていたことから、西洋の社会理論を無批判に導入し、若い人がその方法論を適切に理解していないという結果をとまなう研究は無視され、実際にそこから遠ざかっていた。今日では、科学的な研究方法を用いた社会問題の研究として教えられることが多くなるなど、状況は改善された。実際、今日の社会学は、その方法論がすべての社会科学において使われる包括的な方法論となる可能性を秘めている。だが不幸にも、経済学、法学、心理学など近接の学問がトルコの研究をする際には、社会次元がしばしば無視され、切り離されて考えられているのである。

今日では、より幅広い一般人が、社会学という言葉に魔力があるかのように使用している。ジャーナリスト、コラムニスト、政治家、社会現象への解釈に踏み込むあらゆる人が、社会学者であろうとしている。忘れてはならないのは、社会、家族の中で生活して

いるだけで、社会学を習得するわけではないことだ。「私は村に生まれ、村で生活している、だから農村社会学を教えられる」と言う大学教授に出くわすことは稀なことではない。

我々の最終目標は、若者が、社会学のバックグラウンドをもって理論武装することで、公の場で活動し、彼らの社会的な考え方を社会に生かすことを支援することである。社会学の卒業生たちは、専門的な理解をもっている、調査研究に基づく報告書の執筆、政策立案者に対する政策提言において重要な役割を担っている。

5カ年発展計画の時代には、社会学の卒業生を雇用することが重要と考えられ、各省で業務を委ねられた。しかしながら、1980年の雇用法によってもたらされた変化の結果、社会学の卒業生は、そのような公的部門での雇用の機会を多くを失うことになった。学会は、その当初から、そうした変化を元に戻そうと奮闘してきた。今日でも、社会学の卒業生は、大学の卒業生として、6つの公的機関で働くことができるのみである。長期にわたる政治プロセスを経て、先月、閣僚会議は、社会学の卒業生が多様な政府機関で雇用されることを可能にするような新しい法令に署名した。

20年は始まりにすぎない。やるべきことはまだまだ数多くある。このために我々はフレッシュな人材を欲している。最後に、社会学がより広い社会や社会制度の中で受け入れられるために、多くの障害物を乗り越えることがなお必要であることを強調しておきたい。

本日はご参加いただき、重ねて感謝申し上げます。我が学会の20周年を祝福したいと思います。

(高見具広訳)

¹ これは、2010年12月28日、アンカラにおいてトルコの社会学者に向けたGökçe会長のスピーチの要約版である。

トルコ社会学会は1990年にアンカラで設立された。設立時の会員数は40人だったが、現在は600人の会員がいる。1999年には、閣僚会議の法令によって「公益法人」の地位を授かった。学会は支部を持っていない。20年前の設立以来、この学会は学術会議や研究によって、国際レベルでの評価、名声を獲得してきた。我々の学会は、奉仕を積極的に求める学会なのである。

学会は、22の研究課題、おおよそ20の会議、22の書籍、非政府機関との多数の共同会議を実施している。さらに、1998年以来、査読紙であるJournal of Sociological Researchにおいて、10の翻訳、8の調査プロジェクトを含む、トルコ語、英語両方で合計130の学術論文を公刊してきた。

調査を遂行するのに加えて、学会は生成した知を広めようとし、そのため、より広いコミュニティとの関係を重視している。学会は、任意団体、財団、協会と協力し、コミュニティ関連の計画に携わっている。さらに、研究課題を遂行するために、国家的、国際的な機関と協力している。

このような脈絡で、学会は、家族・社会調査省、東南アナトリア地域開発行政省(GAP)、保健省などの支援を得て、国家レベルでのプロジェクトを引き受けている。学会は、トルコ科学技術研究会議(TÜBİTAK)、国連開発計画(UNDP)、ヨーロッパ連合、UNICEF、NATO、世界銀行からの支援を得て、国家的、国際的なレベルでプロジェクトを遂行している。

学会の最も重要な活動は、国内会議を主催することである。今まで6つの会議が開催された。会議における最も重要な側面は、トルコの社会経

> National Associations in Europe 欧州における各国学会組織の現状

by Roberto Cipriani, President of the ESA Council of National Associations
ロベルト・シプリアーニ(欧州社会学会・各国組織評議員会会長)

2010年10月28日、欧州社会学会が主催する各国組織評議員の会議がパリで開かれ、21の各国学会組織代表が参加した。また、欧州社会学会会長を務めるアナリア・トーレス、前会長のクレア・ウォーレス、そして欧州社会学会の理事も出席した。また欧州委員会の科学・経済・社会研究部門の責任者であるジャン＝ミシェル・ベール、欧州科学財団のリファ・ヴェーファイゼンが特別ゲストとして招かれた。

欧州社会学会は、研究のネットワークと各国の学会組織という2つの骨格から成っている。各国の学会組織は、欧州社会学会の理事会選挙および会長選挙への候補者を

推薦する役割を担うことが規約によって定められている。

本稿では、各国の社会学会組織の特徴について簡潔に報告し、会議の主要な議題であるボローニャ・プロセスや欧州の多くの国々で生じている社会科学の縮小傾向に関する議論については、機会を改めて報告することとしたい。

欧州社会学会 (European National Associations of Sociology)

- ・ ドイツ社会学会は2500人の会員をもち、共同調査・研究のためのインフラを提供している。さらに近年では、会員の多くが職業的研究者となり、欧州における調査・研究の促進を積極的に行っている。
- ・ ノルウェー社会学会は、さまざまなネットワークを通じて、人々を結びつけることに大きな役割を果たしている。
- ・ トルコ社会学会は1990年に設立され、500人の会員を有している。トルコ政府による欧州連合への加盟申請以降、トルコの社会学者たちは西洋の社会学へと関心を向けるようになっていく。
- ・ ルーマニアでは、社会発展の促進を志向し、個々の政策的イニシアティブへと導こうとする闘争的な社会学があると同時に、グローバルな 이슈には目をつぶったミクロな社会的イシューへの関心がある。その結果、社会学は分離されたものとなっている。学会の人数は減少しているが、現在では研究レビューを主としてウェブ上で公開している。
- ・ フランス社会学会が設立されたのは2002年とまだ日が浅い組織であるが、1000人の会員から成り、40の異なる研究ネットワークがある。
- ・ ポルトガル社会学会は2600人の会員がいる。専門家による組織でありかつ学術的な組織でもあり、教育や研究に従事している人々だけでなく、民間企業で働く人々をも組織することを積極的に試みている。
- ・ フィンランドのウェスターマーク協会は1954年に設立され、専門雑誌は1965年に公刊された。
- ・ スイス社会学会は550人の会員をもち、この20年間ほぼ同じ人数で推移している。12の研究委員会があり、欧州社会学会大会が開催されない年に会議を行っている。活動には複数の言語が用いられ、会議はフランス語とドイツ語と英語で行われている。雑誌もこれらの3言語で発行されている。
- ・ ハンガリー社会学会では近年に規約が改訂され、自分たち自身による研究プロジェクトを行うことができるようになった。また毎年1回、会議を組織している。
- ・ オーストリアでは「自家製」の経歴が散見され、アイデンティティの喪失が生じている。学士や修士の学位はその内容によって大きく異なるため、ボローニャ・プロセスは断片化状態になっている。
- ・ スペイン社会学会連合は、それぞれ自律的な地域コミュニティと結びついている。各地域コミュニティのなかで多くの学会活動が行われ、さまざまな種類の雑誌が存在している。学会連合としても会議を組織し、独自の雑誌を発行している。

- ・ イギリスでは、社会学会会員と博士学位取得者の半数は社会学部には勤務していない。近年、イギリス政府は財政改革政策を実施し、それに対して異議を公に表明するいくつか大きな行動が行われた。研究はとても費用がかかるものとなりつつある。
- ・ イタリアの諸大学は、組織面と財政面という二重の危機を経験しつつある。組織面での課題がもたらしているインパクトを測り知ることは難しいが、給与に関して財政面で大きな危機が生じている。
- ・ ポーランドにおいては、社会学は名声のある学問となっているが、そのアイデンティティは共産主義時代に確立された。学士学位請求よりも修士学位請求の方が多いが、多くの請求者が他の学問分野出身者であり、社会学の知識は限られたものである。
- ・ [セルビア北部の]ヴォイヴォディナ社会学会は、非営利かつ非政治的な組織である。研究プロジェクトは、財政問題と多文化間の不和に悩まされている。25のエスニック集団が存在している。
- ・ デンマークでは、すべての分野において給与面で高待遇となっていて、アカデミックの分野からの頭脳流出が生じている。それに加えて学問の基準が高いため、学生がデンマークの大学に参入するのがとても困難になっている。
- ・ マケドニアの学会組織は小さい組織であり、主要な諸大学と密接にむすびついた研究組織であるが、専門家としての利害関心を有している。
- ・ アルバニア社会学会は130人の会員をもち、国内会議を毎年組織している。
- ・ ロシアには、社会学に関する団体が3つあるが、それらはすべてモスクワを拠点としている。社会学は確固とした名声を得ており、社会学者はしばしば政策決定者と緊密となっている。
- ・ イスラエルの社会学は1948年から設立されており、組織はかなり拡大している。毎年開催される会議には、100名前後が出席している。

以上が、ヨーロッパの各国社会学組織の現状である。

(岩館豊記)

> Guilty of Being a Sociologist? 社会学者であることは罪なのか？

by Frédéric Neyrat, University of Limoges
フレデリック・ネラ(リモージュ大学)



国家憲兵隊に連行されるPinar Selek.

社会学とは、科学的な問題だけを取り扱うために作られた学問だと考えている人もいるかもしれない。しかし、リモージュ大学で最近、社会科学の調査が直面した政治的な障害についてのセミナー¹が開催された。社会科学の中でも特に社会学の調査研究は、メディアや法といった政治的な世界でのさまざまな非科学的観点によって、その信頼性をひどく傷つけられてきた。

社会学者が直面しうる2つの事例を見てみよう。最も重要な事例は、Pinar Selekのケースである。彼女は1998年から、複数回にわたってイスタンブールの香料市場での爆破事件の容疑をかけられて起訴されている。専門家はすべて、これらの爆発はガス漏れに由来するものと証言し、裁判官も彼女が無罪であると判決を下しているにもかかわらず、2011年の2月、彼女は再び起訴されたのだ。

Pinar Selekは、社会学者として行動し、クルド人問題というタブーに触れる調査を実施したという点では、確かに有罪であるかもしれない。彼女はPKKの軍人たちにインタビューを行い、そして彼女が警察に逮捕され拷問を受けた時には彼らの姓名を明かすことを拒絶したのだ。トルコ政府

やトルコ警察に属するいくつかの団体の言によれば、クルド人やアルメニア人に対するトルコ政府の公式見解や、国家神話に疑問を呈することは重大な犯罪なのである。

2つ目の事例は、ハンガリーにおける、アグネス・ヘラー—Agnes Heller—に対する反セム人系メディアの過熱したナショナリズム報道と、彼女の「批判者」(4人の哲学者)によるハンガリー有力メディアを通じた「コスポリタンのな」アグネスの言説に対する批判である。

81歳のアグネス・ヘラーは、かつてジョルジュ・ルカーチに師事していた哲学者・社会学者である。彼女は1970年代、共産主義者に対する迫害を逃れた先のアメリカで、ハンナ・アーレントが学長をつとめていたニュー・スクールで学んだ。

彼女は今年のはじめ、同僚とともに、「曖昧で役に立たない」テキストを乱造したという容疑で、200万ユーロの罰金を科された。彼女の名声を貶めるために科されたこの根拠のない罰金は、彼女の故郷をも貶めようとするものであった。事実、彼女の政治活動以外の何物も標的とされてはいな

い。他の知識人と同様に、彼女は、報道の自由を制限しようとするビクトール・オルバンViktor Orbánの独裁政権と、その権威主義者たちを糾弾していたのである。

もしも社会学者がこのようなやり方で犠牲になるとしたら、それはまさしく国家権力が社会学を脅威とみなしているからであると言える。社会学は国家がきっぱりと無視したがっているものを扱い、国家の公式見解が真実かどうか、調査することがあるからである。社会学者は、ヴェーバーの科学倫理に従っているときでさえも、知識人として攻撃されることがある。実際、社会学者の学問的コミットメントのゆえにこそ、国家権力への不信任という試みがなされる場合があるのである。(姫野宏輔訳)

¹ Sylvain Laurens, Frédéric Neyrat, Enquête: de quel droit ? Menaces sur l'enquête en sciences sociales, Bellecombe-en-Bauges, Éditions du Croquant, 2010.